

福島・かつらお村 アート活動のかわら版



スキコム

by KATSURAO COLLECTIVE



「スキコム by Katsurao Collective」は、葛尾村で活動しているアーティストたちの活動のようすをお届けするニュースレターです。畑に堆肥を働き込むように、地域に多様な価値観を混ぜ入れる活動の魅力をお伝えします。

葛尾村でのアート活動が東京へ 盛況御礼！都内展示企画 Report



12/25-30
ひかりをむすんで -COSMIC HABITAT-
渋谷ヒカリエ 8/CUBE1,2,3



クリスマスから年末にかけて、東京・渋谷で Katsurao Collective の活動を紹介する展示企画「ひかりをむすんで」を開催しました。昨年度の「遠き山に日は落ちる」に引き続き、会場は渋谷ヒカリエ 8/CUBE1,2,3です。今回は、異なる存在とともに生きるということを主題として、葛尾村で活動したアーティストたちの作品をご覧いただきました。普段は葛尾村内のご自宅にある、村民による折り紙作品も併せて展示。アーティストたちの創造性と葛尾村の風土を同時に感じていただける空間を仕つらえました。来場者からは「地元を伝える表現として、こういう展示があるんだと感動しました」といったコメントもいただき、盛況のうちには会期が終了いたしました。

9/21-29 Katsurao Collective ART WEEK at Impact HUB Tokyo



9月には、東京・目黒にコワーキングスペースとカフェを構えるグローバルな起業家コミュニティの拠点 Impact HUB Tokyo にて展示企画を実施しました。葛尾村の「風景」をテーマに7名のアーティストの作品が並び、併設のカフェ Delicat Communia のフードやドリンクとともに、多くの皆様にお楽しみいただきました。初日となった9月21日(土)には、オープニングイベントを開催。村外初公開となった工藤将亮監督作品「双つの物語」の上映前には、工藤監督本人によるトーク企画を実施しました。葛尾村での制作の経緯や裏側、アート作品としての本作と商業映画との違いなどについて朗らかにお話いただき、楽しいひとときとなりました。村上郁さんによる「かつらおのサンカクおりがみワークショップ」では、ご来場の方と一緒に、葛尾村民のみなさんが避難生活中につくっていた折り紙、通称「サンカク」を体験。国籍も属性も異なる多くの方に Katsurao Collective の活動を通して葛尾村のことをお届けすることができた、貴重な機会となりました。



地域の素材と触れ合うワークショップ 「かつらお企画室」レポート

「葛尾村の日常の中にある魅力」をアーティストやクリエイターの視点から再発見するワークショップ「かつらお企画室」。今年度もさまざまなプログラムを実施してまいりました。

8月14日(水)は近あづきさんを講師に迎え、葛尾村盆踊り会場の出展ブースにて「かつらおニットバッグづくり体験」を実施しました。葛尾村のニット工場の残糸から好きな色を選んで、家庭用の編み機で小さなバッグを制作。あいにくの豪雨でしたが、そんななかでも、つくる喜びに思わず口角が上がってしまいます。お囃子と雨音に編み機の音が重なり、思い出深いワークショップとなりました。

8月25日(日)は関美来さんによる「色を食べる、色を染める。-オヤマボクチ編-」を開催。葛尾村の郷土保存食「凍み餅」の原料「オヤマボクチ」の煮出し汁で布を染め、あずまバッグをつくりました。でき

あがったお餅をほおぼりながらお互いの完成品を見せ合う、食べておいしい、つくって楽しい夏の一日常になりました。

11月23日(土)には、西会津町からやまあみ鞆(かばん)製作所の片岡美菜さんを講師としてお迎えし、「福島の動物たちの皮なめし前工程体験&レザーキーホルダーづくり」を開催しました。参加者のみなさまは、皮から肉を剥がしていく「剪打ち(せんうち)」を体験し、近くで暮らす動物たちの命のてざわりを感じたようでした。

11月24日(日)に実施したのは「まだ私の中に微かに残る自然の記憶とそれを呼び覚ます香り」。講師は、群馬県六合(くに)村を拠点として活動中の、スパイス料理を媒介として文化と人をデザインする食空間プロデューサー「ヤマトミ」です。



阿武隈山地の「ハヤマ信仰」からヒントを得て、山々の恵みからスパイス

ミックスを調合していく1時間半。人間が創り出す信仰や文化と、ただそこに豊かに存在する自然環境とが分かちがたく結びついていることを、スパイスを通して直感したひとときとなりました。

12月8日(日)には年末恒例の「藁もじりワークショップ」を開催。葛尾村のお父さんたちと、村内の田んぼの稲藁で正月飾りをつくりました。1年の終わりを実感するとともに、また来年へとこの機会を繋いでいきたいと気持ちを新たにするのでした。

今後も「かつらお企画室」では、村に眠るさまざまな素材と触れ合い、この地での日常を軽やかに楽しんでまいります。みなさまのご参加をお待ちしております！



お気に入りできました！



媒染液によって全く異なる色合いに！



山の恵みを嗅ぎで感じます



村のお父さんたちは大しめ縄まで！親睦会も楽しみ

Information

Katsurao Collective 2024 活動報告展

Katsurao AIR 滞在期間後も継続して制作を行った、4名のアーティストによる作品をご覧いただけます。

〈参加アーティスト〉
榎本浩子/大槻唯我/喜多村徹雄/村上郁

日時 2025年2月1日(土)～3月末日(予定)
9:00-17:00

場所 ①葛尾村復興交流館あぜりあ
②葛尾村立葛尾中学校 休校中校舎
2年生教室前

※葛尾村復興交流館あぜりあのみ
(原則 毎週月曜日)はご覧いただけません。

活動アーカイブ配信中！

滞在中に収録したアーティストインタビューやトークイベントの様態、これまでの活動のアーカイブは、「note」「YouTube」「Spotify」他各種オンラインサービスにて配信中です。本紙に掲載しきれなかった裏話も盛りだくさん！ぜひ覗きにきてください。

note YouTube Podcast

▼おわりに
お届けしてきたように、わたしたち Katsurao Collective のスタッフはこの半年間、東京と葛尾村を行ったり来たりして過ごしてきました。対称的なふたつの土地、しかしそれは決してパラレルワールドではなく、極東に浮かぶ同じ島のなかで地続きにつながっています。移動の際は新幹線を利用することが多いのですが、先日ふと思いついて常磐線で東京へ向かってみました。エネルギーも農産物も、そして人々も、この常磐線に乗って上京し、日本の成長を支えてきた「ゆっく」と車窓に流れる風景を眺めながら、そんな地域の歴史に思いを馳せていました。Katsurao Collective のプログラムでは、多くのアーティストやクリエイター、その活動に関心を抱く人々が都心から葛尾村をめざして訪れています。これまでは異なる人の流れができて、アートを媒介として、形のない、これまでになかった何かが生まれ続けている。そんな光景に、改めて感謝したいと思う。今日この頃です。

PR担当 阪本 健吾

Katsurao AIR 2024 OPEN STUDIO vol.2 活動報告会レポート

福島県双葉郡葛尾村に、アーティストやクリエイターが滞在し、リサーチや制作を行うアーティスト・イン・レジデンスのプログラム「Katsurao AIR」。2024年11月21日(木)-24日(日)の4日間、村内の各施設で活動報告会が開催されました。



13年目、たべるをつくる。

増田 拓史 MASUDA Hirofumi

さまざまな地域で、そこに生きる人々の記憶に関する多様な作品を生み出してきた増田拓史さん。葛尾村では、稲作や畜産など、食べるものの生産に関わる人々を追いかけたドキュメンタリー映像を制作しています。今回の報告会では、中間報告版トレーラー映像の上映とともに、制作ノートや制作過程で撮影した写真などを一挙に公開しました。



全村避難の経験を経てもなお、次の世代に農地を引き継ごうとする人々に強く惹かれた増田さん。制作ノートには、こう記されています。
“土地への思いは郷土への誇りなのだろうか。はたまた全く違うものなのだろうか。”
今作の完成版は、改めてお披露目する機会をつくる予定です。
ご期待ください!

普段は古着や布を用いてやわらかい彫刻作品をつくっている大川友希さん。葛尾村では、滞在中に郷土芸能「葛尾三匹獅子舞」の日山(ひやま)神社奉納に立ち会い、リサーチを重ねてきました。

今回の報告会では、葛尾中学校 休校中校舎の美術室横にある小部屋が、とある学校の架空の美術準備室に見立てられました。民俗学者に憧れ、三匹獅子舞に魅せられた、存在しない(かもしれない)美術教師が、まるでこの部屋で先ほどまで過ごしていたかのよう。足を踏み入ると、その空間に詰まった三匹獅子舞を想う熱量に圧倒されました。



報告会期間中に地域の事情をよく知る方が来場し、大川さん本人に三匹獅子舞にまつわる新たな情報を教えてくれたシーンが印象的でした。かたちのない地域の歴史は、こうして語られることで新たに紡がれていくのかもしれません。

美術準備室 -ほんととその間-

大川 友希 OKAWA Yuki



ひかりをすくう

永井 文仁 NAGAI Fumihito

写真を通して、見えないものを見るということにテーマに制作を続けているアーティスト、永井文仁さん。Katsurao Collective の事業開始当初から活動のアーカイブ写真の撮影を手掛けてきましたが、3年目となる今年度はアーティストとして葛尾村との関わりを続けています。

葛尾中学校 休校中校舎の体育館に現れたのは、トラックの荷台をカメラとして用い、葛尾村内を撮影した大きな写真たち。背の高さほどの像(イメージ)には、いまの葛尾村からはいわば漂白されつつある気配が漂っていました。

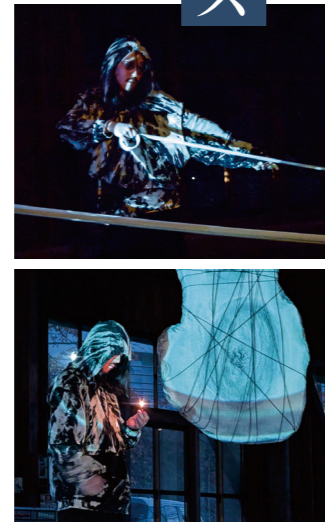
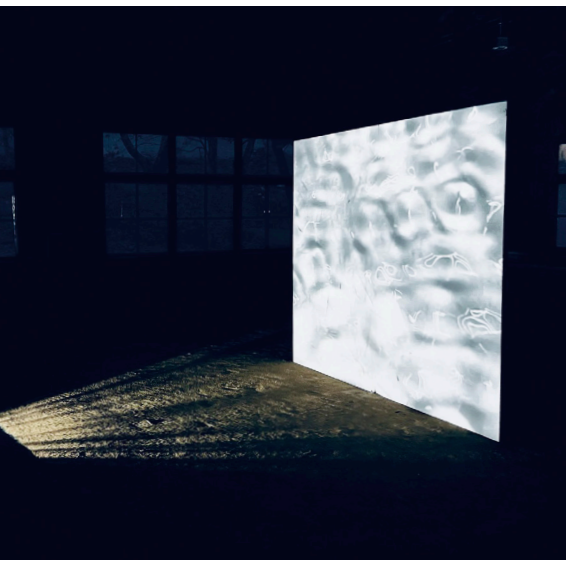
制作に用いたトラックを公開するインスタレーション《TRUCK CAMERA》や震災後初めて開催された三匹獅子舞のお祭りの一日の記憶を綴った写真集《HIYAMA20241012》も展示。多くの方にご覧いただきました。



幻像とサイマティクス

YUKIKATAYAMA

京都府を拠点として活動するサウンドアーティストのYUKIKATAYAMAさんは「幻像とサイマティクス」と題し、葛尾村屋内ゲートボール場を舞台にインスタレーション



シオン作品を制作しました。サイマティクスとは、水や砂に音をあてると、周波数によって特定の幾何学模様などが現れる現象のことを指します。葛尾村内各地で収録した水の音―例えば、湧水の音、エビの陸上養殖工場の水槽の音、温浴施設の浴場の音―がサイマティクスを生じさせ、土地の記憶を表現したサウンドとともに空間を演出していました。

新しい木を探す

斎藤 英理 SAITO Eri



福島市飯野町出身の斎藤英理さんは、映像メディアを扱うアーティスト。今回は滞在期間中に目にした風力発電所のブレード輸送現場をひとつのきっかけに、17分間のエッセイフィルムを制作しました。作中では、阿武隈地域を象徴する存在になりつつある風力発電所が「新しい木」に見立てられています。鑑賞者は、斎藤さんの中にある明確にはまとまらない思考の過程とともに、移り変わるこの地の光景にも思いを馳せていたようでした。

